



上 マーケット研究者で各地にマーケットを仕掛ける鈴木美央さん
下 北本のまちづくりチーム「暮らしの編集室」の江澤勇介さん



マーケットが 教えてくれたこと

特集

市が実施する屋外の仮設マーケット事業が、令和4年全国広報コンクールで内閣総理大臣賞を受賞。参加した一人ひとりが、マーケットに居場所ややりたいことを見出し、「自分事」としてマーケットや北本の魅力を発信していったことが、評価の決め手でした。単なる物の売り買いの場のように思われるマーケット。そこには、人々の暮らしに小さな幸せをプラスする可能性で満ち溢れていました。

「マーケットと聞くといイベントのように思う人が多いかもしれませんが、北本の皆さんは自分たちの日常の延長としてマーケットをとらえ、自らの経験や感じたことについて対話を重ねてきました。マーケットを通して、暮らしやまちの在り方を本気で考えることができたのだと思います」

4月25日。受賞を受け、市役所で開催された記者発表の場で、屋外の仮設マーケット事業「マーケットの学校」& green market（アングリーンマーケット）のアドバイザーを務めてきた鈴木美央さんは、こう語りました。

北本のマーケットの場で繰り返し強調された「日常の延長としてのマーケット」と「対話の重要性」。そこに、単なる物の売り買いの場を超えて、マーケットが暮らしやまちを変える可能性が秘められています。

市がマーケットに取り組む背景には、人口減少や若い世代の転出超過（市へ転入する人より市から転出する人が多い状態）があります。この課題に対応するため、市は令和元年にシティブロモーション担当を新設。移住・定住促進に取り組み始めました。

移住・定住施策にはさまざまありますが、代表的なのが、移住者への補助金制度や駅前への大型マンションの建設など。いずれも、主な対象は市外に住む人です。しかし、市ではシティブロモーションのターゲットを、今、北本に住んでいる人（特に転出超過が顕著な20〜40代前半）に設定しました。全国的に人口減少が進むなか、他所から人を呼び込むのではなく、住んでいる人が北本を好きになることが、まちの活力につながると考えたからです。

マーケットが まちの愛着を向上する

では、どうやって住む人のまちへの愛着を向上すればいいのか。そこで市が着目したのが、北本市観光協会によるマーケット「緑の森めぐり」「秋の収穫祭」でした。これは、雑木林やサンアミニティ北本キャンパスフィールドを会場に、個店が集うマーケットや音楽ライブ、自然と触れ合うワークショップ等を体験できるもの。平成30年の「緑の森めぐり」来場者アンケートでは、20〜40代の若い世代も多く、回答者全体の75%が参加したことで「北本への愛着がわいた」と答えています。

この結果を受け、市は、まちへの愛着を高めるツールとしてマーケットが最適と考え、久喜市でマーケット「緑側日和」を5年間開催してきた江澤勇介さん、様々な自治体とマーケットを仕掛ける鈴木さんとともに、シティブロモーション事業としてマーケットに取り組むことにしました。

江澤さんは、こう振り返ります。「マーケットには、お洒落なものとかセレクトショップのようなイメージを持たれることが多い。しかし、北本でそれをやるのが良いかというところ、決してそうではないはずです。北本ならどういったマーケットがいいのか、誰が担ってくれるのかを考えた時に、それを一緒に考えてくれる人とやるのがいいんじゃないかと思ったんです」

こうして企画されたのが、市民の皆さんと一緒に北本らしいマーケットを考える「マーケットの学校」でした。



北本市観光協会が開催する、雑木林を会場とするマーケット「緑の森めぐり」

「北本は都会ではなく、人々の暮らしの場所。そこから、どんなマーケットがあったら嬉しいかを皆で考えたかったんです」

「マーケットでまちの魅力を認知する。何もなかったら面白さに気づくんです」



誰もが居心地のいい場所に。

『今ここにいる』人たちと一緒に考え、迷い、共有したい。

アンドグリーン マーケット

役割を超えてつながり合う - & green market

「マーケットの学校」の実践の場として、定期的に市役所芝生広場で開催する小さなマーケット。令和3年度は毎月開催し、令和4年度は2か月に1回のペースで開催予定。焚火のブース（「ラボブース」）を中心に、「運営」や「出店者」という線引きにとらわれず、今ここにいる人たちが皆でマーケットの空気を作り上げているのが特徴。来場者も、焚火で焼く野菜を持ってきたり、楽器を演奏したり、能動的にマーケットを楽しむ人が増えています。

「新しいコロナウエイ
ルスの影響で人の
つながりが薄れて
いた時期だったの
で、マーケットの
空気を自治会の皆
さんにも感じても
らい、関係ができ
たらいいなと思っ
ました」

「マーケットの学校（実習編）」芝生広場で朝ごはん（令和2年12月、市役所芝生広場で開催）。休日に、芝生でコーヒを飲んだり朝ごはんを食べたりする、ちよつと特別な時間を過ごしたい——という小さなニーズから生まれた企画です。

マーケットの学校参加者やその友人・知人を中心に軽食の提供やワークショップを開催。全部で10にも満たない出店でしたが、コーヒや季節の野菜を買ったり、アクセサリー作りを楽しむお客さんで賑わいました。マーケットの学校参加者・今井邦夫さんの、畑の大根を焼いて食べる焚火ブースも大盛況。同じく参加者の西村一孝さんは、この日に自身が住む本町一丁目自治会の会長さんを招待していました。

その結果、本町一丁目自治会ではマーケットで使えるチケットを自治会員の皆さんに配布。マーケットにお越しいただき、地域の皆さんと顔の見える関係ができました。こうした人とのつながりは、現在進行形で広がっています。

（実習編）の後に、振り返りのミーティングを開催。それぞれがよかったことや課題に感じたことを共有しました。「忙しくて休憩を取れなかった」等の声も個人の問題にせず、全体で負担を軽減できる仕組みを考えます。こうした反省を生かし、次のマーケットとして「&green market」を令和3年5月8日に開催。以降、「&green market」開催→「マーケットの学校」で振り返り→次の「&green market」に生かす、というサイクルが生まれました。



焚火のブースは、のちに「ラボブース」として出店者や運営者の中間的な存在となります。季節の野菜を焼いて提供する他、出店者さん向けのまかないを用意するなど、足りない部分を補ったり、小さなニーズに対応して、現場で考えながら応える役割を担っています。

「お客さんもすごく穏やかで。30分、40分かかっても待ってくれるんです。私たちと一緒に、あの場の空気を楽しんでくれているんだと思いました」



対話と共有の場 - マーケットの学校

北本らしいマーケットを考えるワークショップ。令和2年9月に開講し、令和2年度は全5回、令和3年度は全3回開催。令和4年度も全3回の開催を予定（詳細は⑥ページへ）。庁舎ホールなどの開放的な場所で開催し、通りすがりに興味を持った人が参加することも。マーケットを通して個人の経験や暮らしについて語り合い、3時間近く対話が続きます。

「二人で進んで何かをやらうとしたことがなかったわが子が、マーケットの場で、初めて自分からお金を使って買い物をすると言ったんです。マーケットには、周囲が優しく見守る『失敗しても大丈夫』な空気があるんだと思います」

令和2年9月。第1回の「マーケットの学校」参加者の一人・菅原亜矢子さんの話です。この日のテーマは「自分の好きなマーケットの写真について語る」。会場のサンアメニティ北本キャンプフィールドに集まったのは、年齢も性別も住むところもさまざまな15人。ひとりずつ、好きなマーケットやそこで体験したことについて語っていきま。自らマーケットを運営している、という人もいれば、地域に関わるきっかけとして参加したという人も。共通しているのが、マーケットを生活や地域に密着した視点で考えていること。アドバイザーの鈴木さん、江澤さんは、一人ひとりのエピソードに耳を傾け、「ここが面白い」というポイントを拾い上げていきます。参加者同士の対話の間も設け、マーケットでやりたいことやそれぞれが考える北本の魅力について共有します。意見は集約せず対話を繰り返す。これが「マ

マーケットの学校 ステイトメント

- 小さなニーズに確実に答える
- もともとあるもの、いる人に目を向ける
- ボーダーを引かない
- 生態系をつくりだす
- 民話を共有するように、地域にファンタジーを作る

迷ったときに立ち返ることができる「地図」として、マーケットの学校で共有された「良さ」を言葉にしたもの。ステイトメントには理念や声明といった意味があります。

「マーケットの学校」です。令和2年度は、5回の（講義編）で、北本らしいマーケットのありかた、自分がマーケットでやってみたいことについて語り合ったのち、市内をめぐり、その場所からどんなマーケットができるかを考えてきました。そこから見えてきたのは、売り上げや来場者というわかりやすい成果を目指すのではなく、暮らしの中に「あったらいいな」と思う、小さなニーズに応えるマーケットにしたいということ。これが形になったのが

「『経験はないけど出てみよう』が受け入れられるのがありがたい。サラリーマンが、地域に関わるきっかけになるんじゃないかな」



マーケットを通じて、年齢も属性も性別も多様な人たちが繋がり、「ご近所さん」のような緩やかな関係に。

「ご近所さん」が増えて 北本が「ホーム」に

マーケットで試行錯誤を繰り返すうちに、参加者の間に生まれた緩やかな結びつき。これを江澤さんは「ご近所さん」に例えています。「名前は知らないけど顔は知っているご近所さん」のような人が増えているんですね。その人たちと、月に「回芝生」に集まって焚き火している感じ。年齢も性別もバラバラだけれど一緒にいるのが面白いんです」

令和3年7月から参加している柳井則子さんも、そんな「ご近所さん」の一人です。

「7年前に上尾から北本に越してきましたが、どこかずっとアウェイのように感じていました。『&green market』で、子どもたちが作った野菜の販売をサポートすることで、たくさんのお会いがありました。皆さんとの関わりを通して、だんだんと自分の居場所ができて。今では、北本がホームだと思っています」

**マーケットが
教えてくれたこと**
市が屋外の仮設マーケット事業に取り組みはじめて、2年が経ち

ます。その間に、まちづくり市民アンケートで、まちへの愛着を測る指標（地域推奨量・地域参加量・地域感謝量）の数値が向上。また、令和元年、令和2年と連続して市の人口が転入超過になりました。シティプロモーション事業として、着実に成果を上げています。さらには、新たなコミュニティ創出や教育、福祉などの課題解決に波及する可能性も期待できます。

一方で、参加者一人ひとりがマーケットに自らの役割や居場所を見出し、その人の暮らしの幸せにつなげている——そこには、市が目指していた成果をはるかに超える価値があります。

マーケットが教えてくれたこと——それは、対話の積み重ねが生む、緩やかな人のつながり。地域に居場所ができて感じる、小さな幸せ。これらを広げていくために、市は、これからもマーケットに取り組み続けます。

北本が好きなのはもちろん、そうでない人も。ぜひ、一度「マーケットの学校」【&green market】へ来てみてください。市は、あなたとの「対話」を求めています。そこに、このまちを変える可能性があると信じているからです。

令和4年度 マーケットの学校

第1回

時 6月19日(日)13:00～

場 北本市役所

定 20人

費 無料

申 市ホームページからお申し込みください。



「マーケットの学校」では、みんなで考える・話し合う時間を大切にしています。北本市役所芝生広場で定期的に行われる「&green market」の中で試したいことやその反省、もっとこうの方がいいことなどをみんなで話して、よりよい場づくりをしていくための場所です。

みなさんのやりたいこと、こんなことがあったらいいなと思うことを教えてください。マーケットを通して、新しい暮らしの楽しみ方を一緒につくっていきましょう。

今年度は芝生広場とその周辺を舞台としたマーケットを、みんなで考えていく予定です。北本のマーケットを作りたい方、北本に関わり合いの方など、多くの方のご参加をお待ちしています。



担当 荒井 菜彩季 主任

問 市長公室シティプロモーション・広報担当 (☎ 511-9119)

「一人ひとりの暮らしが幸せになっていく。それが、&green market で実現できているんじゃないかな」